同和

「美しい虹」のイメージに接近する試み

京都・部落差別を「両側から超える」普通の人々の全国交流会

――部落差別をなくそうとする運動があり、それに部落の環境改善をはかる行政の施策が加わって部落の暮らしが向上してきた。私たちは、部落のおかれている劣悪な生活条件が変われば周囲の差別意識もうすれる、と思っていた。

――しかし、差別は残った。なぜか。解放運動の理論はとれでよかったのか。ここで部落差別とは何かを根本的に点検する必要があるだろう。

七月三〇、三一の両日、京都・楽友会館などで第五回部落問題全国交流会が開かれ、横井清・富山大学教授は基調講演の中でこう語った。

会場は横断幕ひとつなく、床にはござが敷いてあって、どこか田舎芝居の見物風景に似ていたが、両日とも長時間みっちり続いた交流会では、最近の部落差別をめぐる熱い講演と討議が繰り広げられた。

この会の発端は四年前。部落解放運動の現状に疑問を抱き、年々見えにくさを増す部落問題をどうとらえ直すか。そのうえで、なお根をはる差別意識をどう溶かすかを考える人たちが岐阜で旗揚げした。その中心に藤田敬一・岐阜大学助教授がいた。

当初集まった五〇人ほどの参加者は、まず二つの目標を設定した。一つは、差別・被差別の双方が共同の営みとして両側から超えること。もう一つは、差別・被差別を考えるさいの立場・資格を取っ払って率直に議論することだった。その積み重ねが昨年五月、藤田氏の『同和はこわい考』（阿吽社刊）を生んだ。

部落とは？　差別とは？　全国各地から集まった人々が問題を一から問い直す（京都・楽友会館で）

以後約一年、この一四〇ページたらずの軽装本は各方面に大きな衝撃を与えた。本誌でも、今年二月から七月まで断続的に六人の論者に登場を願ったから、まだ記憶に新しいはずだ。

「人の目の高さ」で

こうした背景があるせいか、今年の集会の参加者は一挙に二〇〇人余へ。栃木から熊本まで散らばる老若男女は、「肩書」にとらわれず、自分以外の何者をも代表しない、部落問題に関心をもつ人たち」だ。部落の人がいる。活動家がいる。学生、教師、主婦もいる。「人の目の高さ」を反映した口調や問題意識が目立つ。こんなふうに。

「部落解放運動は、一切の特権を許さないところから出発したからこそ、多くの人々の共感を呼んだはずだ。ところがいつからか、一部とはいえ、わが兄弟たちに特権意識がふくらんだ気がする。今、運動に必要なのは、部落内外からのオベンチャラ抜きの直言だ」（吉田明・部落解放同盟京都府連委員長）

「解放運動は今、差別解消に取り組もうとする部落外の人たちを大切にせず、運動にとって利益になる相手を重視する傾向がある。つまり、政党であり、議会関係者であり、行政、企業、労組、宗教界などだ。あげく、日常出会う人たちとの対話の場を失っている」（解放同盟大阪府連傘下の地域活動家）

「両側から超えるといっても、じつにむずかしい。部落外の人たちは、面と向かえば差別などないという。それでいて、よそへ行くと、部落は何かとうるさいところだ、などと平気でいったりする。まともな意見でも部落の人間ゆえ通じないとすれば、先方には期待をかけず、一人一人、歩くよりほかない」（岡山県の初老の男性）

若い声は大胆だ。「灰色」化した差別を前に、差別や人権といったことばを使わず現状を語れないか、という意見が出る。それが「そろそろ解放運動指導部の解放理論についていく運動は清算する時期ではないか」という提起にもつながる。

どの場面も、かつて『こわい考』に流れこんだ発想が新しい流路、活路を求めてなまなましくぶつかっているように見えた。

最後に、三重県の在日韓国人女性の発言を紹介しておこう。あえて展望にこだわらず、「不定形の集合体」を自認する会のこれからに、欠かせぬ視点を含んでいるように思えるからだ。

『「両側から超える」とは虹の橋のように美しいイメージです。でも、その橋の右か左に在日韓国・朝鮮人は入るんでしょうか。できたら、一方には日本人、もう一方には私たちという虹も考えてほしい。私自身は『両側』にかける虹を何本ももっていたい」（本誌・千本健一郎）